

1. 中越地震、東日本大震災の経験を経て、「道の駅」が災害時に地域防災の機能を果たしえることがわかってきた。岐阜県東濃地域の10の道の駅のように、自治体と災害時協力協定を結んでいる道の駅もある。又、制度開始後、20年余を経て、「道の駅」が地域活性化の拠点となりうることも明らかになった。「道の駅」は、そこで生み出される所得がその地域にとどまる為、都市と農村の格差是正に役に立つ。アジア、アフリカ、中米などの多くの途上国では、都市と農村の大きな格差が重大問題になっており、「道の駅」に強い関心を示す国は多い。
2. 日本の「道の駅」を訪れると良くわかるが、地域の夫々の特性を生かして、地域の人々を中心として、多彩で活気あふれる活動が行われている。高齢者や女性の生産者も、栽培方法を工夫したりしながら、出来るだけ良いものをと日々努力し、道の駅に出荷している。駅で働く人も女性が多く、高齢者も多い。全国の人口の4分の1以上が65歳以上という高齢社会の日本では、こうした機会は重要である。
3. 他の国における「道の駅」の導入には、夫々の国情にあった形で展開することが必要である。重要なことは、地域の人々の熱意と、そして継続する努力である。加えて、中央・地方政府の後押しも欠かせない。今回の国連防災会議のパブリック・フォーラムを機に、新たに認識された地域防災という役割をテコに、国の内外の多くの人に、「道の駅」に関心を寄せていただき、地域の人々の防災を含めた生活の質の向上に役立てていただければと思う。